

白い道

(さべつ)
しかも無間の業に生きる

第一部 法然・親鸞とその時代 (中)

三國連太郎

白い道

（さべつ）
しかも無間の業に生きる

第一部 法然・親鸞とその時代（中）

三國連太郎

毎日新聞社

三國連太郎 (みくに れんたろう)

1923年(大正12)1月20日、群馬県の生まれ、俳優。本名・佐藤政雄。父の仕事先の移動にともない静岡県に移り県立豆陽中学入学。中学3年のとき大阪市へ行き、皿洗い、ペンキ塗り、旋盤工など職業を転々、この間朝鮮・中国に行くなど放浪生活。43年12月、徴兵中支へ、漢口で終戦。50年、単身上京。同年12月、松竹大船の研究生、「善魔」の主役に抜擢される。ブルー・リボン賞とNHK映画賞の男優主演賞(60年)、毎日映画コンクールとキネマ旬報の男優主演賞(65年)など数々の賞に輝く。63年10月、日本プロを設立。67年1月、東京宝塚劇場の『明治百年』同6月『三国志』に出演。69年8月、A・P・Cを設立。75年末から親鸞の伝記映画を企画。

白い道——法然・親鸞とその時代——第1部・中 定価1000円

1982年5月15日 印刷

Printed in Japan

1982年5月30日 発行

著 者 三 國 連 太 郎

編集人 菊 地 敬 夫

発行人 関 根 望

発行所 毎 日 新 聞 社

〒100 東京都千代田区一ツ橋

〒530 大阪市北区堂島

〒802 北九州市小倉北区紺屋町

〒450 名古屋市 中村区 名 駅

印刷・精興社／製本・大口製本

0093-400266-7904

© R. MIKUNI 1982

白
い
道へ第一部中
目
次

第七章

以仁王の令旨

決起への決断

11

使者行家

22

頼朝の衝撃

28

頼政謀叛

36

福原遷都

45

遊女

54

第八章

東国決起

計画された敗戦

69

幻影に怯える清盛

82

第九章

親鸞の出家

坂東武士の糾合	95
解放の宴	107
群像	113

京都の惨状	127
-------	-----

慈円と喝食槃宴	137
---------	-----

腐臭の巷	144
------	-----

頼朝と康信の問答	150
----------	-----

第十章

義仲流転

平家の都落ち	163
--------	-----

後白河、叡山へ 173

陥 穽 181

山猿の信仰 193

東国政權樹立 199

黒衣の国司 209

裏切られた義仲 216

第十一章 落武者と親鸞

女人救済 227

平家の残党狩り 234

落人達の末路 245

第十二章

少女の微笑

255

大原問答

三十年ぶりの対決

267

大原問答の粉飾

276

頼朝上洛

284

佐々木莊騷擾

292

親鸞夢告の背景

297

装 幀 熊谷博人
カバー写真 川路勝美

〔全三部作・第一部　しかも無間の業まべつに生きる〕

白い道

——法然・親鸞とその時代——

中

第七章 以仁王の令旨

決起への決断

瀬戸内海は畿内と西国を結ぶ海上の交通路として発達し、厳島（伊都岐島）はその要衝の地であると共に、沿岸を往来する日宋貿易船の守護神として平家一門から篤い信仰を集めた。安芸守となつた清盛が厳島の地理的条件を生かし、日宋貿易の発展のための根拠地として眼をつけたのは当然のことと言える。嘉祿二年（一一七〇年）九月、宋の国書がもたらされた時、遣唐使停止以来、鎖国を国是として返牒を送らない先例をくつがえし、清盛は独断で返牒を送り、公式に国交を開くことを求めたのだ。かくて、宋船は自由に瀬戸内に入り、奈良期に行基が開いたといわれる大輪田泊（兵庫港）を基地に來泊が盛んとなり、清盛自身も、唐船と呼ばれた当時の宋商船を幾艘か手に入れ、厳島参詣などに用いた。大輪田泊の大きかりな修築が行なわれたのもその頃である。同時に播磨の山田浦、室津、備前の牛窓、児島、備後の敷名泊などには平家の手によって港灣の宿泊施設がつくられた。

清盛は直接、宋と交易を行なうことによって、「楊州の金、荊州の珠、吳郡の綾、蜀江の錦、七珍万宝、一つとして闕けたる事なし」といわれるほどの巨利を得たのである。この利益を守るために清盛は、八重の潮路を越えて厳島へ月詣での悲願を立てたのであった。恐らく、生涯の厳島参詣は数十度にも及んだものと思われる。弟の頼盛でさえも二十度の参詣を遂げたと自らが述べている。

承安四年（一一七四年）三月にも、後白河法皇は建春門院と共に多くの公卿以下を従えて厳島に行き、安元二年（一一七六年）には、建礼門院は高倉帝の中宮として父清盛および一門とこの参詣に加わったことがみられる。

そして、治承四年（一一八〇年）二月二十一日、高倉帝は大納言藤原邦綱の五条亭で讓位の儀を行ない、清盛の娘、建礼門院徳子の子であるわずか三歳の安徳天皇に位を讓って新院となり、厳島を初の社参と決めたのであった。当時、讓位後の最初の社参は石清水八幡宮か賀茂社、春日社、あるいは日吉社を定例としていたが、清盛の強請により、その先例を破ってはるばる厳島への社参となつたのである。それは前年、関白基房以下三十九名を解官し、後白河法皇を鳥羽に幽閉し、その政治権力を掌中にした清盛の強権の発動であつた。

その変わり身の速さに長けて、のちに九条兼実と張り合い、土御門帝の外祖父となり、また曹洞禅の開祖道元の父ともなる源通親は、この社参に随行し、『高倉院厳島御幸記』を書き残しているが、それによると、「思ひもかけぬ海の果てへ浪凌ぎて如何なるべき御幸ぞと嘆き思へども、荒き浪の気色、風もやまねば、口より外に出す人もなし」と清盛の意向によって不承不承ながら厳島へ向かった様子が伺える。

その旅程は、建礼門院徳子の母時子の居住する八条殿を出て、鳥羽造道を真直ぐ東行し、後白河法皇が幽閉されている鳥羽殿を左に見ながら、賀茂川と桂川の合流点である草津の河港より船に乗り、澱川に出た。そして、藤原邦綱の山荘のあった寺江から枚方を通り、神崎川に入って、吹田から尼崎に出たものである。その間に、福原の清盛は宋船と中国人の添乗をつけて、「この船にお乗

りになるがよい」と申し出たことが記録されている。

「福原より、今日佳き日とて、『船に召し初^{はつ}むべし。』と、唐の船参らせたり。実^{まこと}におどろく／＼しく、絵に描きたるに違わず。唐人ぞつきて参りたる」

当時の宋船はジャンク型の帆船で、大きさはさまざまのようであるが、收容人数は五十人といわれる大きさのものであった。この宋船と中国人の添乗人を提供した清盛の心中は、おのが権勢への自信を示して面目躍如たるものがあつた。福原に立ち寄つた高倉院の前に、厳島より呼び寄せた「皆唐の女の装ひぞしたる」巫女が現われ、天降つた天女も正にかくあるかと思わせるような美しい服装と舞いに度肝を抜かされたのである。宋貿易で利益をむさぼる清盛の、なみなみならぬ中国傾注がこれにもうかがわれる。

一行は須磨、高砂、室津、兎島、馬島を経て、厳島に至るのであるが、その間、高倉院はじめ一行は、行く先々で清盛の権勢をまざまざと見せつけられる。しかし、鬱々たる気分は晴れないものの、「ひとすじに平禅門になりかえ」つた源通親には、まばゆいばかりの厳島行であつたことが『高倉院厳島御幸記』から伺える。同時に、そこには、平家全盛期に平家出身の母を持ち、清盛の娘を妻として、清盛の放恣^{はうし}なまでの政治的野心によって、道具の如く弄^{もてあそ}ばれた悲運の若者、高倉院の姿も見い出すことができる。

だが、この厳島行は高倉院の個人の悲しみ以上の問題をも孕^{はら}んでいた。

延暦寺東塔の大講堂は、続々と集結する大衆らの持つ松明^{たふまつ}の光に浮かび上がっていた。大講堂は

幾たびかの内紛で、あたかも廢墟の如くくずれ落ちていた。それは、法然がはじめて眼にした三十五年前と、騒擾する大衆のどよめきは同じようであったが、天台法華教學の講論の場としては見るかげもなくなっていた。東塔の中核になる一乗止観院の鐘が全山を揺るがすと、それに呼応した西塔がさらに横川へと伝えた。そして、鐘の音は坂本の里坊まで伝わり、山麓から早鐘が鈍い音色を伴なうて応えるように馳け上がってくる。それは学生と堂衆の根深い対立を休止させ、園城寺との確執も打ち棄てさせる緊急のものであった。

闇の中に無数の松明の灯が突如出現し、それが谷といわず尾根といわず、蟻の行列のように、ゆらゆらとゆらめきながら大講堂目指して登ってくる。「東谷妙観院総勢二十一入着到」「南谷大仙院総勢十八入着到」と各谷の大衆の到着を告げる声が、次々と大講堂前の広場に飢した。

源十郎行家は頭巾で顔を覆い、檜の大本の陰に身をひそめながら、次第に数を増す大衆に鋭い視線を向けていた。行家は為義の第十子として生まれ、本名を義盛と叫んだ。保元・平治の乱によって父を失い、長兄義朝をはじめほとんどの兄を亡くした行家は、その後、熊野新宮に隠れていた。で新宮十郎ともいわれた。その間、「新宮に隠れ籠りて夜昼安き心なし、いかがして素懷をとげて再び家門の耻をきよめん」と『源平盛衰記』に見られるように、実に二十年もの歳月をそこに雌伏していたのである。

行家にとって家門再興の足がかりは、係累は異なるが摂津源氏の棟梁として平家にも信望の厚い源三位頼政であった。頼政をてことして同族河内源氏の流れをくみ、木曾に勢力を張る甥の義仲、甲斐に根づいた甲斐源氏、あるいは関東に点在する諸源氏、そして平家一門の隆盛を快く思わず、